

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第21回

## モンゴル 小国の葛藤

須賀 努

コラムニスト・アジアンウオッチャー

8月のモンゴルは実にさわやかだった。4年ぶりに訪れたウランバートル（以下 UB）の発展ぶりに驚き、その後訪れたロシア国境では、緩やかな発展にこの国らしい姿を見た。今回は某大学の調査団に同行し、2週間を過ごしてみた。

### 発展するウランバートル

4年ぶりの UB は発展の途上にあつた。空港は変わっていなかった（第2空港建設予定あり）が、市内までは専用道路ができ、かなりスムーズな通行となっていた。市内に入るあたりから以前は見られなかった建築中のマンションやオフィスが並び、かなりの建設ラッシュとなっていた。

思い返せば前回訪ねた2009年3月は前年のリーマンショックの余波で、モンゴル経済はかなり追い込まれており、経済も破たん寸前で、1か月の定期預金金利が米ドルで8.5%程度だった。その後 IMF などの支援も入り、最悪の事態を免れ、そして中国経済の急回復に合わせて、発展してきた経緯がある。

モンゴルの冬は厳しい寒さで工事が難しく、ビルのほか、道路工事なども夏の時期に一斉に行われるため、市内の至る所で道路工事による渋滞が発生し、夏がかき入れ時の観光客の足を引っ張るほどであった。この時期 UB に来た観光客は大草原を見る代わりに車の山を見る羽目となっていた。

### 所得は低くない

その車種はモンゴルらしく、ランドクルーザーが多い。全て輸入車であり、ハンドルの関係もあり中

東あたりで作られたトヨタ車を購入する人もいる。ただその価格は1台日本円で1,000万円をはるかに超えているというが、一部の政府幹部や大金持ちだけが保有しているわけではなく、我々が思うモンゴルのイメージとはかけ離れた贅沢な買い物もしているようだ。

モンゴルの一人あたり GDP は3,000ドルを超えている。勿論一部の石炭王などが巨額の収入を得ているのも事実であり、人口が僅か260万人と少ないことも数字が大きくなる要因なのだが、それにしても UB には豊かな人が多い。市内中心部にはルイヴィトンなど高級ブランドショップが出来ており、買い物しているのも外国人ではなく、モンゴル人だった。

また地方にいる遊牧民のゲルを訪れたが、ゲルは近代化されており、携帯や PC は当たり前、衛星放送設備まである。車も保有しており、移動もだいぶ楽になったとのこと。子供たちは UB の大学を卒業して、そのまま就職しているとの話もあり、遊牧生活は決して貧しくないことを実感した。



写真1 草原に建つゲルの様子

### 親日国だが

モンゴルはかなりの親日国である。大相撲での力士の活躍のみならず、日本への親近感を抱いている人が多い。日本製品への信頼度も非常に高く、草原や悪路を走る機会の多い車では、丈夫で安定性のあ



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。  
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。  
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



る日本車は値段が高くても好まれている。

日本企業から見れば人口規模が小さく、モンゴルを魅力的な市場として見る



写真2 UB 豪華な結婚式

向きは少ないようだが、比較的収入が高いこと、中国製品を嫌うこと、そして親日的であることから、需要はかなりあることが分かる。韓国製品はのりやカップ麺などの食品が大いに市場に出回っており、このニッチな市場に入り込んでいる。一方モンゴル製品の日本への輸出、特に食品は相当ハードルが高く、殆ど入ってきていない。乳製品など美味しい物もあり、これまた残念な状況だ。

中国がくしゃみをしたら

順調に発展しているように見えたモンゴルだが、実は経済的な懸念が出てきている。モンゴル経済の柱は資源などの輸出。その9割は中国向けと言われているが、昨年来の中国経済の減速により、石炭の輸出が減少、価格も下落している。

また海外からの直接投資を見ると、統計上は中国からの投資は30%台だが、実はオランダ、ルクセンブルグなどを経由した迂回投資がかなりあり、全体の8割程度が中国からの投資、特に鉱山などの資源向けと言われている。こうなると中国頼みの経済運営が透けて見え、以前のような高度成長が終焉した中国の恩恵を受けるには限界があることが分かる。

実際国内第5位の商業銀行の破たんを政府が救済したが、その他小規模銀行の経営危機が表面化、今

後も警戒の必要があると政府も認めており、モンゴル経済は難しい運営を迫られている。因みにモンゴルでは歴史的経緯もあり、UBには漢字の看板は全く見られないほど中国は嫌われている。当然中国による資源向けの大量投資に嫌悪感を示す人も多い。

また国内の政治家が副業でビジネスに手を出しており、汚職がひどいことも常に指摘されている。権力を持った者が金儲けに走り、国家を顧みないことが経済危機の理由の一つ、との声も聞かれた。この辺りは根が深いようで、モンゴルのアキレス腱とも言われている。

バランス外交

4年前にUBを訪れた際は、ロシアも一定の影響力を持っていると感じられたが、今回はロシアの存在感を示すものは見られなかった。韓国も積極的に投資、在モンゴル韓国人も目立って増えていたはずだが、韓国の影響力も限定的との印象であった。むしろ北朝鮮の影がチラチラ見え隠れしていた。

中国頼みからの脱却の方策としては、日本への期待が大きいのと思われる。今年3月には安倍総理がモンゴルを単独訪問し、モンゴル側は大いに喜び、その後の外交は非常にスムーズだとの話もあった。安倍総理の狙いはいわゆる『中国包囲網』だったのだろうか。

小国であるモンゴルは、非常に高度なバランス外交を行う必要がある。ロシアがダメなら日本を持ってくる、中国は嫌いでも経済的に使えるなら使う。強かな外交、これからどうなっていくのであろうか。経済状況を含めて、今後注目していきたい。